



ター選手も生まれない。果たして、このシステムで長く成功を取めることができるのだろうか。そう考えるのが、自然である。

「今はそれが大事なのです。でも、ゴールは少しずつ目指し、ゆっくりと現状のシステムから脱してゆくことになるでしょう。もしもあなたがMLSの選手、あるいはオーナーなら、自分の才能と手腕を発揮したいと思うのは当たり前でしょう?」

取材の最終日、ロサンゼルス郊外にあるホーム・デポ・センターで、チームUSA対ニューヨーク・レッドブルの試合を観戦した。チームUSAは、リアル・ソルトレイクとともに、去年から新たに加わったチームで、これもユニークなのは、あのメキシコの

名門グア达拉ハラ(愛称チーバス)のアメリカ支店なのである。

オーナーは、やり手の若手投資家だ。アントニオ・クエ会長は、チームUSAの可能性を相対に感じているようだ。

「1年目こそ散々な結果だったが、まだ2年目のチームの割には、ここはサポーターの数が多い。ここLAIには国に帰りたいくても帰れないメキシコ人が大勢住んでいますから、今日は本家チームUSAの試合と重なっているので2万人を切っていますが、この前のチャラクシーとのダービーマッチは満員の大盛り上がりでしたよ」

チームスタッフのほとんどはメキシコ人で、英語よりもスペイン語が主流。当然、ス

タジアムのアナウンスもスペイン語が先で、英語はそのあとにくる。人種の垣根、移民の国ならではの新しいチーム誕生だ。

試合前のホーム・デポ・センターを、12年前と同じように、2時間ほど散策した。そこには殺気立った空気も、試合前の緊張感もなかったが、あのと違って、スタジアム周辺はサッカー観戦を楽しもうという活気で満ち溢れていた。

ここは本当にアメリカなのか?

試合前の興奮は冷めることはなく、むしろ何かを「ディスカバー」した充実感もあって、リーグとほぼ同レベルのサッカーを、十分に堪能することができた。